



今年の教区の目標

すべての命を守るため、
キリストと共なる
平和の道を歩みましょう。

〒902-0067 那覇市安里3-7-2
カトリック那覇教区本部
TEL.098-863-2020 FAX.098-863-8474
発行人 W.F.バート司教 1部40円
<http://www.naha.catholic.jp/>

(1) 2020年1月1日 (毎月1日発行) カトリック那覇教区報 MINAMI NO KŌMYŌ 第734号 (1月号)



2020年司教年頭挨拶

那覇教区の兄弟姉妹の皆さん 新年の慶びを申し上げます。

カトリック那覇教区長 ウェイン・F・バート司教

二〇一九年には喜ばしいニュースと悲しいニュースがありました。教皇様の日本訪問は大きな恵みでした。「すべての命を守るために」というテーマで教皇様からの命の尊さについてのメッセージを受けました。日々の生活の中で教皇様の言葉を生かしたいと思います。幸いなことに沖縄からたくさんの方々が教皇様の長崎や東京でのミサに参加しました。

しかし、首里城火災の悲しいニュースもありました。たくさんの方が精神的なショックを受けました。首里城の焼失が起こったとき、皆が泣きましたが、しかしその涙のあとには、皆が再建のために頑張っていく決意を宣言しました。この力強い沖縄の心「不屈」があるからこそ、災害にめげずに新しい希望をもって頑張っていくことができます。一日も早く再建ができるために私たちも沖縄県民のひとりとして協力しましょう。

二〇二〇年の那覇教区目標の言葉を選ぶ時、教皇様の日本訪問と沖縄の現状を考えながら、テーマを決定しました。「すべての命を守るため、キリストと共なる平和の道を歩みましょう。」という目標です。ウチナーグチでは「うまんちゅぬ いぬち まむゆるたみに キリストとう うまじゅん 平和ぬみち あちいちゃびら」と表現し、ミヤークフツでは「んーなが んぬつう まむゆうたみ キリストとう まーつき 平和ぬ んつう あいかやー」と表現できましようか。おいおい各地域のしまくとうばで味わうことでより深く染みわたるようになってきたらと考えています。

ところで、カトリック中央協議会によると「教皇フランシスコ来日のテーマ『すべてのいのちを守るため』は、同教皇の回勅『ラウダート・シ』(二〇一五年発表) 巻末に収められている『被造物とともにささげるキリスト者の祈り』から取られています。わたしたち一人ひとりは、神の似姿としてののちを与えられ、すべての人とともに永遠の祖国を目指すよう導かれています。

そしてこの世界も、神によつて『人の住む所として形づくられ』(イザヤ四十五・18)、保たれています。ですから、『すべてのいのちを守るため』には、人間一人ひとりの尊厳はもちろんのこと、環境も大切にされなければなりません。しかし、『わたしたち皆がともに暮らす家』である地球は、人間の手によつて蹂躪されて苦しみ、そのうめく声は、世界中のうち捨てられた人々の嘆きと重なっています。「今年中に那覇教区目標の前半では、教皇様の来日のテーマを考え、沖縄に住む一人ひとりの尊厳と沖縄の大自然の大切さについて分かち合いたいと思います。

教区目標の後半には「キリストと共なる平和の道を歩みましょう」と書いてあります。「キリストと一緒に」と書いてあるならキリストの傍にいたいという意味だけを表現するですが「キリストと共なる」と書いてあるので「キリストによつて、キリストと共に、キリストのうちに、すなわちキリストに一致」して、キリストの道を歩むという意義深いことを表現しています。忠実にキリストの平和の道を歩むために、キリストと一致して

いる状況が重要なのです。初代教会ではキリスト教は「道」と言われました。キリスト者はキリストのうちに神の道を歩むのです。その道は平和の道です。那覇教区の皆さんは一人ひとりとして、そして教区として、共に神の平和の道を歩む使命があります。今年中にその使命についても皆さんと分かち合いたいと思います。

「どんなことでも思い煩うのは、やめなさい。何ごとにつけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによつて守るでしょう。」(フィリピ 四・6)

皆さん、良い平和に満ちた年をお迎えください。教皇様の日本訪れの喜びを心の中で思いめぐらしながら、首里城の再建への希望をいだきつつ、神の母マリアと共にこの平和と希望の新しい年を歩みはじめましょう。

**新年おめでとう
ございます。**

New Year's Message from the Bishop for 2020

Happy New Year to all my Brothers and Sisters of Naha Diocese!

At the beginning of the new year. I want to wish all of you a very Happy New Year. I hope that the New Year will be filled with every blessing from the Lord both for you personally and for your families. According to your country of origin, your New Year's celebrations may differ but what we all have in common is a deep desire for good health, happiness and peace during the coming year. May the Lord look upon you with love and mercy and may he bless you in every way possible during the Year 2020.

For 2020, I have selected the following statement for our diocesan aim for the year.

“In order to protect all life, together in Christ let us walk the path of peace.” "Para proteger la vida entera, juntos caminemos con Cristo el camino de la paz." (Spanish). Để bảo vệ mọi sự sống, hãy cùng nhau tiến bước trong Đức Kitô trên con đường bình an. (Vietnamese) Upang pangalagaan ang bawat buhay, Samahan natin si Kristo na tahakin ang daan ng kapayapaan. (Tagalog) I took the first part of this statement from the theme for the Pope's visit to Japan. According to an explanation of the theme from the Japanese Bishops' Conference, "The theme of Pope Francis's visit to Japan, (Protect All Life), is quoted from a phrase in 'A Christian prayer in union with creation' at the end of his Encyclical Letter Laudato Sí. Each of us is given life as an image of God and led to advance toward our eternal homeland with all people. And this world is also designed and maintained by God 'to be lived in' (Isaiah 45,18). Therefore, in order to 'protect all life', we must respect not only each person's dignity but also the environment. However, the earth as 'our common home' is now trampled by humankind and groans with pain. Those groans overlap with the distress of all the abandoned people of the world." As the first part of our Naha Diocesan aim for 2020, I would like for us to think together about the theme of the Pope's visit to Japan by discussing with each other our concerns for the dignity of every

person living in Okinawa, and by actively showing care and concern for the way that we use the natural environment of Okinawa.

The second part of our Naha Diocesan aim for 2020 is, **“together in Christ let us walk the path of peace”**. As Christians if we are not together both with Christ and with each other then it will be very difficult for us to achieve any kind of personal or lasting peace. In the Mass we say, “through Him and with Him, and in Him,” when the priest raises the host prior to communion. We state publicly that all that we do, we do in unity with Christ. This is our life as a Christian believer.

In the early church, Christianity was known as the “way”. Christians were known as those who walked the path of God. The path of God is the road to peace. As individuals and as members of Naha Diocese, we have the mission in life of always walking along the path of peace, reconciliation and love. In the Philippians it states, “Do not be anxious about anything, but in every situation, by prayer and petition, with thanksgiving, present your requests to God. And the peace of God, which transcends all understanding, will guard your hearts and your minds in Christ Jesus.” (Philippians 4:6-7).

I hope that everyone will be able to welcome a good year filled with peace. Know that you will all be in my prayers and thoughts during the coming year.



Happy New Year!!!



Comenzando el nuevo año 2020 quiero ofrecer mis felicitaciones cariñosas a los fieles de habla Hispana. Ustedes son una parte muy importante de nuestra Iglesia, y les agradezco mucho sus aportes.

安里教会バザー開催のお知らせ



日時／令和2年2月2日(日)
午前10時～午後3時

2年に一度のバザーを開催します。

【抽選会・エイサー・料理・蚤の市・ホーリーコーナー】
チャリティーを中心に売り上げを活用したいと思います。何より皆様と楽しいひとときを過ごす為に準備しますので、是非お越し下さい。



那覇教区平和委員会

日時：1月26日(日) 午後2時～4時

場所：カトリック安里教会

講師：与那覇恵子 (名桜大学名誉教授・英語教員・詩人)

演題：「安倍政権、高支持率の謎 ～沖縄から見えるもの～」

カトリック那覇教区平和委員会 問い合わせ ☎090-1949-6569 (編福)

1月
例会



主よ、残された日々を 数えることを教えてください

フランシス・ティエン神父
安里教会 主任司祭

し、予定を書き記しながら、思うことがあり
ます。それは一年間の予定の中に、私の死ぬ
日があるかもしれません。そうなるなら、今
年が地上で最後の年になるかもしれない。今
日が地上で捧げる最後のミサや最後の日にな
るかもしれません。そのような思いで、詩編
九十の言葉を思い出します。

それは「千年といえども御目には昨日が今
日へと移る夜の一時に過ぎません。あなたは
眠りの中に人を漂わせ、朝が来れば、人は草
のように移ろいます。朝が来れば花を咲かせ、
やがて移ろい、夕べにはしおれ、枯れていき
ます。残された日々を数えることを教え、知
恵に向かう心を与えてください。朝ごとにあ
なたの慈しみを注ぎ、日々私たちに、喜びの
歌を歌わせてください」(詩編九〇・4、14)



今年二〇二〇年二月五日には私は沖縄に来て
十一年にな
りますが、
昨日のこと
のように思
います。時
間が早く過
ぎてしま
います。詩編
の言葉通り

です。「人は草のように移ろいます。朝が来
れば花を咲かせ、やがて移ろい、夕べにはし
おれ、枯れていきます」。私は過ぎ去った日々
を悲しむのではなく、感謝の内に新しい心を
持つて過去の日々を数え直し、現在の日々を
数え、将来の日々を数え始めたいです。しか
し誰もこの地上で残された日々を何日か数え
ることはできません。

それができるのは時の主人である、神様だ
けが私に正しい人生の日々の数え方を教えて
くださると信じています。ですから、私は信

頼と希望の心を持つて神に向かつて『残され
た日々を数えることを教え、知恵に向かう心
を与えてください。朝ごとにあなたの慈しみ
を注ぎ、日々私たちに、喜びの歌を歌わせて
ください』とよく祈り捧げています。

昔よりも現代に対して『主よ、残された日々
を数えることを教え、知恵に向かう心を与
えてください』という祈りがもつとも必要で
よく合うと思います。特に大多数の若者が毎
日ソーシャルネットワークのウェブサイトを
使っており、ほとんど手に負えません。ソー
シャルネットワークサイトで費やす時間
は重要です。ソーシャルネットワークで費や
す時間は、リスト上の友人の数に比例して増
加します。例えば、私は一〇〇人の友人の更
新を表示するのに一〇分掛かります。もし
一千人の友人になると、この時間は少なくと
も一〇倍に急速に増加します。私はそのため
に一日に一〇〇分だけ掛けると、一年間なら、
三六五〇〇分になります。それは一年間に
六〇八時間あるいは二五五時間掛かります。
それは私の年休と同じです。スマートフォン
を持つている多くの若者たちはそれから離れ
ることができません。なぜですか？それは個
人情報を常に更新する必要があるたり、美し
い写真を投稿したり、受信トレイに返信した
り、コメントしたり、感情を書き込んだりす
るからかもしれません。ソーシャルネット
ワークに「中毒」したら、毎朝目が覚めると、
最初にすべきことは個人ページを「チェック」
することです。もしそうなる私たちは自分
の時間を悪用し、「仮想の世界のために私た
ち自身の貴重なプレゼンツを盗まれてしま
います。私はこの現代の問題と戦いながら、マ
タイによる福音の中にあるタラントンの例え
を思い出しています。神様は私にたくさんの
タラントンを与えてください(マタイ

二十五・14、30)。その中の一番大事なもの
は時間だと思えます。最後の最後に神様は私
に『フランシス、忠実な良い僕だ。よくやった。
お前は少しのものに忠実であったから、多く
のものを管理させよう。主人と一緒に喜んで
くれ』ということを知りたいと望んでいます。

それができるには、まず神様から頂いたタ
ラントンである尊い時間をよく用いなければ
なりません。時は金なりとよく言われます。
むしろ、時間は愛です。人々が互いのために
与え合う最高のものの一つは時間だと思いま
す。時間は貴重です。時間は神様からの贈
り物です。愛と時間は二つの異なるカテゴリー
ですが、密接に関連していると思います。時
間は愛を測定します。愛は時間の経過と共に
成長し、または死ぬかもしれませんが。愛のな
い時間は冷たくて退屈します。ですから愛す
る人は、なめらかな喜びに満ちた時間に生き
る人です。愛を知っている人は、時間をお金
よりも大切と見ている人です。聖書は次のよ
うに定義しています。神はアルファとオメガ、
始めと終わりです(イザヤ四十四・6)。言
い換えると、神は時間です。

そして聖ヨハネは次のように定義していま
す。「神は愛です」(一ヨハネ四・8)。神は
時間と愛です。だから神の内に愛と時間はい
つも一緒に留まっています。神の愛の内に住
む人は、時間を愛してよく用いている人です。
皆さん、過去の過ぎた日々を思い、新年を
愛の心をもって喜んで迎えながら、『残され
た日々を数えることを教え、知恵に向かう心
を与えてください』、『朝ごとにあなたの慈し
みを注ぎ、日々私たちに、喜びの歌を歌わせ
てください』と信頼と希望を持つて時間の主
人であり愛である神様に向かつて心をついに
して祈りましょう。

二〇一九年は終わりました。神様に感謝し
ましょう！一年間、大変お世話になり、皆さ
ん一人ひとりに感謝申し上げます。互いに感
謝しましょう。これから始まる新年を神様の
愛と慈しみの中に心を込めて喜びましょう。
那覇教区の皆さん、新年、おめでとうござい
ます！私達は去る年を送り新年を迎える時
に、皆が忙しくても一つの事をやらなければ
なりません。新しいカレンダーを壁に掛ける
ことです。また、新しい手帳に一年間の予定
を書き記すと思います。私は今年も忙しくな
りそうだと思います。予定を書き記します。
多くの予定の中に、年休の一月月を取って、
故郷に帰り、家族と友達と共に時間を過ごす
のが楽しみだと、予定を書き記します。しか



那覇教区平和委員会



11月例会の報告 過去に目を閉ざす者は現在にも盲目となる

平和委員会の11月例会は12月1日(日)、カトリック安里教会で、琉球大学社会学部琉球アジア文化学科準教授 呉 世宗(オ・セジョン)氏を講師としてお迎えした。演題は「沖縄の歴史の中の朝鮮人～加害と連帯～」。「沖縄の中の朝鮮人」というタイトルだが、その実態はいまだ判明していないのが実情である。沖縄県庁援護課による沖縄戦での被害についての報告には「朝鮮人『軍夫』『慰安婦』の被害者数は『不詳』」となっている。また1965年に未来社から出版された朴慶植著『朝鮮人強制連行の記録』には沖縄の朝鮮人については一切触れられていない。しかしそれは致し方ないことであった。それというのも、調査の旗振り役の朝鮮総連沖縄本部が設置されたのは施政権返還直後の1972年9月だったからである。ある意味沖縄の朝鮮人は朝鮮人にさえ忘れられていたのだ。人は二度死ぬという。1度目は肉体的な死であるが、2度目は忘却による死である。

平和の礎の基本方針は「満州事変」から沖縄戦までの「15年戦争」の間に命を奪われた全ての沖縄県出身者、そして沖縄戦でなくなった米国人、英国人、朝鮮人、台湾人、日本「本土」出身者などすべての人の名を刻銘するとなっている。そこには牛島満の名もある。朝鮮人についても毎年数名が刻銘される状況で刻銘者の数は現在464人。被害者の遺族の中には牛島中将と一緒に刻銘されたくないという人もいたとのこと。1995年の平和の礎の除幕式の時に来沖したチョン・テギョン氏は次のように言っている。「ここで忘れてならないのは犠牲者の遺族の中で子々孫々永大の恥辱であるとの理由で刻銘を拒んだ方々がおられたということです」。確定した平和の礎の朝鮮人464人を基にし、呉氏が推測した朝鮮人男性は5,000人～6,000人、朝鮮人女性は1,000人～1,500人ほど。沖縄戦を生き抜いた朝鮮人「軍夫」は3,000人ほど、「慰安婦」は2～300人ほどという推測。「軍夫」は7割から8割以上が、そして「慰安婦」は5割から7割がなくなったことになる。

呉氏は沖縄には加害者の側面があることを指摘した。帝国日本の植民地的な秩序とは、ピラミットの頂上に天皇がいて、その底辺にあるのが沖縄の人であった。しかし共に被害者である沖縄の人は朝鮮人との差別化を図ったというのだ。証言を2つ紹介する。その1つが学徒兵・具志堅均の証言:「僕たちの感覚ではもう当たり前みたいな、『朝鮮人は』奴隷みたいな意識あったんでしょね、三等国民というような。日本の統治下にあるということは、台湾・朝鮮も植民地的な見方はありましたからね。日本の軍隊の下働きをするのが当然という考え方はありましたね。そういう意識がないと使うことはできませんからね」。次に、自分の娘が朝鮮人と結婚した母親の証言:「私は朝鮮人がどういうわけか、うす汚れていて、きたなく、また怖い人たちのように思っていました。朝鮮人は、当時、那覇でも田舎でも、そういうように見られていました。美津(娘)が朝鮮人といっしょになったというので、私は世間に顔向けもできませんでした。」そして差別化の極みが、1945年8月20日におきた久米島での朝鮮人虐殺事件である。この事件は朝鮮人に対する島民の偏見が、ある朝鮮人一家をスパイとして「密告」して殺害に至らしめるという事件である。

1960年代沖縄の歴史の柱の1つが復帰運動であるが、復帰運動にはアジア・アフリカ諸国との連帯の側面があったという。グ

ローバルな視点では、信託統治地域として米国の圧政下にあった沖縄住民の開放運動だととらえられていたのだ。1960年12月、国連総会で「植民地諸国・諸人民に対する独立付与に関する宣言」が採択される。この宣言は「あらゆる形式における植民地主義を終結せしめる」ために、「信託統治地域、非自治地域及びいまだ独立を達成していないその他のすべての諸地域において、これら地域の諸人民が完全な独立及び自由を享受することを可能ならしめるために、{・・・} いかなる条件ないし留保を付することなしに、すべての権能を移管する諸措置を直ちにとるべきこと」が宣言の一つとして採択された。当然この宣言には沖縄も含まれている。1963年、第3回アジア・アフリカ人民連帯会議で「沖縄を返せ! 国際共同行動4・28『沖縄デー』」を提案し、会議で承認される。「沖縄の軍事基地は日本の独立、世界の平和、A・Aの民族独立運動にとって大きな障害になっている。即時日本に返還されるべきこと。4月28日を沖縄デーとする」という決議内容であった。これに対して復帰協は「沖縄開放の戦いが、沖縄を含む日本人民の戦いとしてのみでなく、アジア・アフリカの民族解放と平和への武力介入の重要な一環として位置づけられた」と高い評価を与えている。」1965年の復帰協定期総会、米国のヴェトナム介入は「平和に対する重大な挑戦」だとする、「アメリカのヴェトナム民主共和国への武力介入にたいする抗議決議」を決議する。沖縄の復帰運動は、沖縄と日本との関係だけに閉じ込められた運動ではなく、アジアやアフリカに開かれた運動だったからこそ、パレスチナや朝鮮などのいわゆる第三世界からも、共に戦おうという連帯のメッセージが送られてきたのである。

現在の日韓関係は最悪の状態にある。その根底にある「歴史的認識の違い」にあると呉氏は明言する。韓国側が「慰安婦」や「徴用工」の問題で日本側に対峙するたびに、米国、米軍側が介入をしてくる。1995年の日韓条約締結の際は米東アジア戦略(ヴェトナム戦争への参戦)が影響した。そして米軍は9・11以降の中東への軍事的介入主義から、主として中国を牽制・封鎖するためにアジア・太平洋に経済・外交・軍事上のウエイトをシフトしてきている。このアジア復帰路線を成功させるためには韓日間の軍事協力が必須なのだ。2015年末に、「最終的で不可逆的な解決」に至ったことを「合意」したいいわゆる「慰安婦合意」は、米国のアジア復帰路線の遂行には、歴史的事実である慰安婦問題を抑制したのである。日韓関係を考えるときに米国の存在を同時に見る必要がある、「米国のアジア戦略を変質させていくこと、基地問題を解決していくことの契機になりうる場所の一つが沖縄である」と呉氏は講演を結んだ。

安倍政権に近い御用学者は日本の歴史の暗部や恥部を隠蔽し、慰安婦問題、徴用工の問題や南京事件などなど無かったものにしてしようとしている。そして歴史の事実と真摯に取り組むことを自虐史観として揶揄し、一蹴する。そして教科書からも削除してきた。

ところでナチス・ドイツの蛮行に真摯に向き合い、ユダヤ人や近隣諸国に真摯に謝罪したドイツの政治家がいた。第6代ドイツ大統領ヴァイツェッカー氏である。彼は1995年に「荒野の40年」というあまりにも有名なスピーチをした。この拙稿のタイトル「過去に目を閉じるものは現在にも盲目となる」はそのスピーチからの引用である。

(平和委員 稲福捷夫)

2019年12月拡大司祭・助祭会議議事録 開催日時: 2019年12月3日(火) 10:00~12:00 開催場所: 教区センター

1. 報告及び連絡事項

- ・前回(11月会議)の議事録に沿って新田が報告と確認。
- ・司教、司祭の休暇、会議、研修会等の不在予定が報告された。
ウェイン司教、12月11~13日、司教会議、潮見、中央協議会。ロドニー神父、12月22日~23日、フィリピン共同体クリスマス・ミサ、宮古へ。マーシーさん、12月10日、カリタス・ジャパン合同会議、潮見。津波古さん、12月4日、災害支援準備会議、福岡。
- ・ウェイン司教から、11月17日に行われた中神父七回忌追悼ミサについての報告が行われた。甥子さんたち3人の参列があったこと、それぞれが中神父への思いを語ってくれたこと等が報告された。
- ・教皇庁教理省からの「カトリック教会の司教たちへの書簡“Placuit Deo”ーキリスト教の救いのいくつかの側面について」に掲載されているキリスト教信仰の重要ポイントについて司祭や信徒の理解が深めるために働きかけるようにとの要請を受け、6月の常任司教委員会において設置されたP.D.検討特別委員会から提案がなされ、2019年度定例司教総会中の「司教の集い」で上記内容を勉強するプログラムが行われた。それを受け、司祭たちにも、この文書と勉強会の内容が掲載された本が配られ、よく理解し司牧に資するよう司教から要請があった。
- ・教皇訪日記念カードが各教区に配られたのを受けて、マーシーさんから各小教区に分配されたが、枚数に限りがあるので、各自ではなく、各家庭に1枚などバランスよく配布して欲しいとの要請があった。また、正義と平和協議会の新しいパンフレットや岡田大司教の新著の紹介も行われ、教区に配られた分は必要とする小教区に配布された。
- ・津波古事務局より、日本典礼委員会が作成した日本の殉教者を記念するミサ用の祭服の紹介があり、購入を希望する小教区は、それぞれで注文するよう要請があった。
- ・ウェイン司教より、教皇訪日ミサに参列、共同司式した司祭たちに、各自の感想や感銘を受けたことについて分かち合うよう要請があった。教区からはウェイン司教と押川司教、藤澤神父、アジット神父、ナビーン神父、ブイ神父、マイケル神父、ロドニー神父が教皇ミサに与り、全員が感想を分かち合った。
- ・2020年の3教区合同黙想会について、津波古事務局より、6月1日(月)~5日(金)までの日程で、安里を会場に行われるので、教区司祭たちにはこの黙想会への参加を優先的に予定するよう要請があった。

その他

- ・首里城火災における支援金の呼びかけに関しては、首里教会独自の取組みとしては許可したが、個人の寄付控除などのことも考慮して信者も一県民として協力するよう奨励しつつも、教区としては募金を行わないことが司教から報告された。
- ・教区事務局より、来年1月までに教区及びローマ負担金を振込むよう要請された。
- ・アジット神父より、12月15日(日)安里教会を会場に行われる、石川教会の取組みについての趣旨説明と参加が呼びかけられた。
- ・12月21日(土)に首里教会を会場に行われる青少年クリスマス会と親子コレジオについて、担当のヨアキム神父から日程説明と参加の呼びかけへの協力要請が行われた。

2. 審議事項

- ・マーシーさんより1月の司教訪問予定や、司教の日程の追加変更の聞き取りが行われた。
- ・カテキスタ養成プログラムについて、担当の新垣助祭本人から体調不良のため、担当者交代の意思表示があり、新垣助祭の推薦等も踏まえ、ウェイン司教が後任者の意思を確認し話し合っただけで決定したい旨の報告があった。
- ・各小教区の待降節、クリスマス、年末年始の予定について、主任司祭から報告が行われた。
- ・来年の教区目標については、ウェイン司教から提案、意見聴取がなされた。今回の意見を考慮したうえで、更に深めて年頭挨拶に発表することが報告された。
- ・来年2月の教区の日について、合同堅信式の提案もあったが、合同堅信式は別の日が良いとの意見が大勢を占め、教区の日には従来通り司祭、修道者の記念日と信徒の金婚式を祝う為に準備していくことが確認された。特に各主任司祭は、特別な配慮をもって信徒の金婚祝該当者をもれなく報告するよう要請がなされた。
- ・2020年キリスト教一致祈禱週間2020年1月18日(土)~25日(土)、今回は、「人々は大変親切にしてくれた」(使徒言行録28・2参照)をテーマに行われる。担当のクレーバー神父から小冊子『キリスト教一致祈禱週間』が必要であれば、クレーバー神父まで申し込むよう要請があった。サンプルとして3~4部を各小教区に配布する。
- ・次回の司祭会議は1月7日(火)10:00~12:00教区センター(安里)で行われる。

2019年12月11日 記録: 新田 選 承認: ウェイン・フランシス・バート司教



葬祭の「やすらい企画」

私たちは故人とご遺族の意向を最優先に考えます。何でもご相談下さい。

那覇市首里鳥掘町4-57-3
TEL&FAX:098-885-8205
http://w1.nirai.ne.jp/yasurai
E-mail:yasurai@nirai.ne.jp

24時間受付

~ご遺族の心をもって奉仕する~
そうてんしゃ

葬典社

- *創業30数余年・・・。
- *皆様に支えられ「感謝」とともに人生を閉じるためのお手伝いをさせていただいております。
- *ご質問、ご相談、24時間、いつでもお電話下さい。
「ゆうなの会」会員募集中です。

ひが たかしげ
(実務担当) 比嘉 高茂

24時間
受付

てんごく
☎098-853-1059



皆さんは強い人になりたいと思ったことはありませんか？私はよくそう思います。たとえば、身体が丈夫であるとか、辛いことがあっても泣かないような、そういう強さに憧れていました。皆さんも、ケンカに負けないうとか、ピンチをチャンスに変えるなどという強さが欲しいと思っただけがあるでしょう。しかし、私は近頃、本当の強さについて考えるようになりまし。そのたびに思い出す、ひとりのお姉さんがいます。前にも「南の光明」(二〇一五年十二月号)で紹介しましたが、そのお姉さんが、私の中で一番「強い」人です。

そのお姉さんは、出会ったとき、中学二年生でした。小学校低学年だった私にはよく分からなかったけど、何か大きな病気を抱えているようでした。楽しみにしていた修学旅行に行けなくなっただけをしきりに悔しがっていました。そんな中、お姉さんはブログを立ち上げました。そこには深刻な病名が隠さず書かれ、絶対に病気に負けないぞという強いメッセージが感じられました。病室とは思えないほど可愛いものに囲まれた写真や、看護師さんのおもしろいエピソードが毎日のようにアップされ、たくさん応援コメントや「いいね」がついていました。

たて軸よこ軸

本当の強さとは

小祿教会 名富 ゆか(中二)

別れは突然でした。「EPOに残された最後のステータスメッセージは「火曜日、面接がんばる！」でした。お姉さんは高校の推薦入試の面接を控えていて、見事に合格もしていました。夢いっぱいの高校生活が始まるうとしていたのに、さぞかし悔しかっただろうと私まで悔しくなりました。お姉さんは病気に負けてしま

まったんだなと残念に思っていました。しかし私もあの頃のお姉さんと同じ年齢になり、気づいたことがあります。それは、お姉さんは決して病気に負けたのではないということ。その証拠に、私やほかの友達の中に、今もちゃんと生きています。そう思える理由は、お姉さんの人との関わりかたにあると思います。

お姉さんは、病室にいるあいだも、学校の友だちや病院の看護師さんやお医者さん、院内学級の先生や友だち、ひとりひとりのことについて、こんな会話をしていた、こんなことで笑った、おかげでがんばれる、ありがとう。と名前を挙げたり、

写真を載せたりして紹介していました。ここで紹介された人はみんな、自分にはこんな良いところがあるんだと嬉しい気持ちになって、もっといろいろ頑張ろうという気持ちになったと思います。そのときは気づかなかったかも知れないけれど、みんなお姉さんに励まされていたと思います。お姉さんは優しい人だったから、元気がない友達や自信がない友達がとうをブログで言うことで、励ましてあげてたと思います。もちろん私も励まされた一人です。

お姉さんは「病気に負けないで頑張る！」と言っていたのですが、実は自分の余命を知っていました。だからみんなには内緒でお別れのメッセージを残してしましました。自分が亡くなったあとに見つかるように。そこには、みんなへのありがとうと、病気が自分を強くしてくれたから何も恨んではないこと、自分は天国でみんなを見守っているからね、ということが明るい言葉をたくさん使った綴られていました。天国はパラダイスだから、そこは幸せなところだから、毎日笑って暮らせるところだから、みんなは心配しないで、ということでした。

今読み返すと、これは、残される私たちに対する最後の思いやりだったことに気づきます。最後まで私たちの心が折れてしまわないように考えてくれたんだと。私はこれが本当の強さなんだと思うようになりました。どんなに辛いときも人への思いやりを忘れず、優しさを与え続ける、そんな強さを本当の強さというんだと思います。

私にも辛いことや悲しいことがいっぱいあります。そんなときは、とても人に優しくなんてなれません。でも私を生まされた時から知ってるラサール神父様はこう話してくれました。「弱った心は底が欠けたコーヒーカップに似ている。いくら注いでも満たされない。でも誰かに傷を治してもらって、またカップが満たされたら、今度は他の人のカップにコーヒーを注いであげられる」。

だから私は心が弱っているときは、愛情を注いでくれる人に甘えることにしました。自分のカップが愛情でいっぱいに戻ったら、ほかの人にも優しくなれます。お姉さんが、お見舞いに来てくれた人へありがとうを言って、ほかのみんなに優しさを分け与え続けたように、私も、私

に愛情をくれる人たちに心を満たしてもらったら、ありがとうを言って、その分を満たしていこうと思います。心が傷ついたときに、歯を食いしばって我慢したり、やられた分だけやり返すのが強いんじゃないなくて、自分を心配してくれる人からの愛情をいっぱいもらって、治してもらって、それからまた立ち上がって、周りに優しい言葉をかけ続ける、ということも強さと言っていると思います。私はそういう強さなら、自分にも持てると思いたいのです。

お姉さん、もうすぐ私は、あなたの年齢を追い越してしまします。お姉さんのような優しくて強い人になれるように、これからも天国パラダイスから、応援しててください。

NPO 法人ぶどう園の会

訪問看護ステーションクララ




TEL&FAX:098-937-5001

住所 沖縄市泡瀬2丁目37-15

- ・基本受付 月曜日～金曜日(申込、相談など)
- ・営業時間 8:30～17:30
- ・営業日 24時間365日(緊急対応含む)

声 角笛

「闇から光へ」写真展 宮古島市で開催

泡瀬教会 山田圭吾

「精神病患者監護法」という法律によって精神障がい者を座敷牢や敷地内の小屋に強制的に隔離した「私宅監置」に関する写真展が、宮古島市未来創造センターで開催された。

昨年四月の県立博物館・美術館での開催以来、「いつ宮古地方でやるのかと待ちかねていた」という方もいて、十一月十四日から十七日までのわずか四日間の期間中、八百四十名余が来場し関心の高さをうかがわせた。

閉じ込められていた人の顔を見つめ、じっくりと説明文を読んだりする人や、現存する「監置小屋」のレプリカを恐る恐るのぞき込んだり、入ってみて体験する人たちも多々いた。「小さい頃に見た」とか「私の住んでいた島にもいくつあった」との証言も寄せられたが、地域で問題なく共に暮らしていた人が「治安維持」の為に称して、「動物以下」と言われるほどの暗く不衛生な場所に十年以上も閉じ込められていたこと、中には死亡したことしか出られなかつ

た人もいたことを知り、閉じ込められた人や、そうせざるを得なかった家族への思いを涙ながらに分かち合う姿も見られた。

主催者（沖縄県精神保健福祉会連合会）では、県内に限らず全国各地でも開催しているのぜひ来場してほしいと呼びかけている。



「沖縄宣教の歴史」講演を聞いて①

真栄原教会 宮良安郁

押川司教の「沖縄宣教の歴史」講演はスライド映写を使いながら話すもので分かり易く工夫されていた。内容に迫力があつたのは自ら米国へ渡って集めた資料を基に話されたことで、例えばジェローム・コベル神父とはどういふ人物だったかを写真記録などを引用しながら説明されたことであつた。

オーバン神父に関しては彼がスポーツ好きな面があり野球仲間のリリーダー格であつたとか、母へ宛てた手紙を母の死後、引き取ってバッグに入れ、自分が死んだ後以外は開けないようにと大切に保管する人であつたとか、FANGという団体がアメリカ力にあつてそれは何だろうと思つていたらFATHER ALBAN MISSION GUILD（オーバン神父のミッションを支える会）というもので資金・物資の面で支えるというもので、それは私には全く想像もつかないニュースであつた。

オーバン神父にこんな人的つながりがあつたことの証拠で、私が知りたいと思う、なぜレイ神父の相棒としてオーバン神父が選ばれたかということの答えの一つになるかも知れないと思つた。バチカンからの沖縄宣教派遣発令を受けた時、レイ神父はグアムにいたが、オーバン神父は確かニューヨークにいた筈で、そのことからどうして彼が指名されたのかに私は関心があつた。講演後、押川司教に尋ねたところ知らないとのことであつた。

「沖縄宣教の歴史」を振り返り、戦前と戦後に分けてみると、何と言つても戦後のカプチン会のレイ神父とオーバン神父による

沖縄宣教の歩みが大きな意味を持つていふことが分かる。この戦後の沖縄宣教になぜ米国カプチン会が選ばれたのか、どうしてレイ神父とオーバン神父の二人が送りこまれたのかは誰しも知りたいことであつた。今回の押川司教の講演はこの問いに答えようとするものだつたと思う。

終戦の翌年、一九四六年、米国メリノール会レイン司教は満州から米本土へ米軍貨物船で帰国途中沖縄へ二週間立ち寄り、カトリック教会が見当たらないことに気づき、帰国後バチカンに宛て沖縄布教を進言した。

奇しくも同年の一九四六年、艦船の従軍司教であつたフランシスコ会ガブリエル神父は奄美・沖縄を二ヵ月視察し、奄美寄港滞在時には一二〇名の子供に洗礼を授けていて、その中に当時五歳の押川壽夫（一九四一年生まれ、霊名は神父にあやかつてガブリエル）もいた。ガブリエル神父は東京の教皇使節マレラ大司教に奄美・沖縄の布教を上申した。

この沖縄宣教を求める「レイン司教の進言」と「ガブリエル神父の上申」の二つの動きはその後不思議な動きをし一つに収束して行くことになる。この二つは終戦の翌年一九四六年に起きたが、これが起きる前にもう

二つ重大な動きが戦時中に既に起きていて、これが実はその「進言」と「上申」の収束に重大な影響を与えていることが判明したのである。

それは、太平洋戦争は一九四一年十二月八日から一九四五年八月十五日までの約四年間続いたがその期間最初の一九四一年十二月下旬にグアム島は日本軍に急襲占領され、グアム在のカプチン会神父など十四名が戦争捕虜として日本に連行され神戸にある捕虜抑留所に収容されて終戦までの約四年間抑留された。その十四名の中にレイ神父がいたのである。

そして、神戸抑留所にたまたま日本語に堪能なスクート会（淳心会）のベルギー人神父がいて彼が日本語教室を開いていた。暇つぶしにレイ神父はこれに参加した。

この期間中にたまたま抑留者視察の東京駐在教皇使節マレラ大司教なる人物の訪問があり、そこで熱心に日本語を学んでいるレイ神父の姿が大司教の印象に残り、このことは大きな歴史の歯車が動き出すことを意味していた。それはマレラ大司教の心には抑留所で日本語を学ぶレイ神父、この時もうちわのような大きく長いひげをしていたのだろう、彼のことが印象づけられたのだつた。（次号に続く）

教区 NEWS 教会

バザー

普天間教会

一致の喜び！

十一月三日ウエイン司教様の
式のもとに、御ミサが捧げら
れ、バザーが開催されました。

地区長のデニス神父様はじめ
多くの司祭、シスター、各小教区
の大勢の信徒の皆様、その知人友
人もバザーにお越し下さりあり
がとうございました。そしてたく
さんの寄贈もいただき心から感
謝申し上げます。

今年のバザーは「信仰・希望・
愛」をテーマに掲げ、祈りのう
ちに準備を進めて参りました。
まずは料理の見当として、ベト



ナム料理、フィリピン料理、カ
レーライス、手打ち沖縄そば、
豚肉の生姜焼き弁当、沖縄ぜん



シスター
ローザ仲里美江

2019年11月7日 老衰のため
50年の奉獻生活を終え帰天。
享年89歳。

1931年5月6日 竹富町西表で生まれる。
1960年5月1日 入会
1963年2月2日 初誓願
1969年2月2日 終生誓願

初誓願後、八重山のカテキスタ、祈りの家
の責任者、文化センター勤務、沖縄のちの
電話のボランティアなど歴任し、特に文化セ
ンターでは聖書百週間の指導や困っている人
々の悩み事相談に当たり、また、訪問活動
を通して多くの方々を信仰へと導き、宣教活
動の使命に徹した。

晩年は車椅子の生活でしたが、いつも明る
く、「神は慈しみ深くその憐みは永遠」をモ
ットーに生き、59年の奉獻生活を全うし、慈
しみ深い御父のもとに旅立った。

訃報

◆与那原教会

マリア・フアンタ 眞境名春江様
二〇一九年十一月二十一日帰天
享年六十九歳

◆開南教会

テレシア 仲宗根 苗子様
二〇一九年十一月二十四日帰天
享年八十五歳

アグネス 饒平名 敏子様
二〇一九年十二月十七日帰天
享年八十四歳

二〇一九年十二月十七日帰天
享年八十四歳

ざい、ケーキ、ゼリー等々！安
全で皆様に喜んでおいしくいた
だけるようにそれぞれのグルー
プが喧々囂々意見を出し合いな
がら作りました。料理のお味は
いかがでしたでしょうか。ケー
キはスラヴィク・ミサエさん
(八十八才) が毎年一人で担当
して作っておりましたが、そ
ろ次世代の若者に伝授しなけ
ればということ、主任司祭ナ
ビーン神父様をはじめ三十代か
ら七十代の若者が指導を受けな
がら作りました(七十代も教会
では若者です)。エプロン作製
グループは魔法の手の持ち主、
島袋ジェニーさんの采配の下、
二十四着も作りました。クロス
ステッチの刺繍は世界に二つと
ない私だけのエプロンです。エ
プロン作りには他の教会の方も
貢献してくれました。

オーケシオンでは貴重な品々
が寄付され、ビンゴゲームや舞台
での踊り等、賑やかに
神様に呼び集められた
喜びの歓声であふれて
いました。ドン・ボス
コの「謙遜で強く、た
くましい者となりなさ
い」という言葉に感謝
です。素直に平和な気持ちで心を
一致させ、笑顔と安らぎを発信す
るべく努力してまいりました。至
らない点も多々あったかと思
います。

お越しいただいた方々、お越
しいただけなかったが、チケッ
トを購入していただいた方々、
その他いろんな方々の協力の下、
食事のブースは完売で、ステー
ジも盛況のうちに終えることが
できました。ありがとうございます
ました。(伊差川和子)

教区女性の会研修会

「死者の月」の十一月、教区女
性の会では、小祿教会において
研修会を行った。

始めに押川司教による「沖縄
の宣教の歴史」の講話に耳を傾
け、続いて、先の大戦で亡くなっ
た司祭たちを追悼するため、「平
和の礎」に赴いて祈りを捧げた。
以下、会員の皆様から寄せられ
た感想を分ち合う。

■十三歳の頃、石垣島で戦争を
体験しました。神様からいただ
いた命を大切にしていこうと

洗礼おめでとうございます

名護教会 (二〇一九年十月二十七日)

ヨハネ・ケンティ 松川慎之丞 六歳
マリア 松川 史依 三歳

一人ひとりが考え、平和を築い
ていく努力をしていきたいと思
いました。(八十代)

■今回の研修は、沖縄の歴史に
ついて、興味深く拝聴し、感動
しました。(七十代)

■平和の礎でクレーパー神父様
を中心に、「平和の祈り」を全員
で唱えました。礎に刻まれている
名前を見ながら、司祭や神学
生、多くの犠牲者のことを思い
巡らしました。(六十代)

■礎に向かう車中の会話で、乗
り合わせた五名中二人の方の身
内が戦争で犠牲になり、礎に名
前が刻まれていることを聞き、
こんなに身近に犠牲となられた
方々がおられることに胸が熱く
なりました。世界に平和がある
ようにと願わずにはいられます
ませんでした。(五十代)

■押川司教様の講話と平和の礎
でのフィールドワークを通して、
平和について深く考え、家庭の
中から平和が構築していけるよ
うにしていきたいと強く感じま
した。(三十代)

(女性の会代表・伊佐悦子)